

歌とともにふりかえる日本近代史

国民はどのように 総力戦体制に組み込まれていったのか

県立高校社会科教師
川島 啓一

はじめに

あるレコード会社の宣伝文句に「NO MUSIC NO LIFE」という言葉があります。私たちが現代に生きる者にとって、まさに音楽や歌は生活と切り離せないものになっています。それは、生徒たちも同じです。多くの生徒が歌を聴くと「癒される」「気分転換になる」「元気をもらえる」などと話します。歌はその時代の世相をよく表す貴重な史料でもあります。生徒の好奇心をくすぐりつつ、歴史事項にアプローチしていく上で、歌を活用することは効果的です。

授業では、自由民権期から戦時中にかけて歌われた歌を題材として、国民の戦争協力⇨総力戦体制がどのようにつくられていったのか、生徒と一緒に考えてみました。その一端をご紹介します。

戦意高揚の歌に変貌した 「オッペケペー節」

一般に「オッペケペー節」は、自由民権運動の時期の歌として紹介されることが多いですが、実はこの歌が流行したのは憲法が制定され、帝国議会がスタートした1890年代です。自由党の壮士から役者

となり一世を風靡した川上音二郎が、一座の日本全国ツアーの幕間に歌って、口コミで爆発的な流行を生み出しました。その後、「オッペケペー節」の歌詞は、時代の変化にあわせて何度も改作されています。

そこで授業では、1890年にブームとなった頃の歌詞と1894年に歌われた歌詞を比較してみました（資料1）。1890年の歌は民権運動を引き継ぎ、政府を批判する民党サイドにたち、権利や自由をみとめない超然主義的な政府を批判しています。しかし1894年になると日清戦争開戦を機に清国を批判する歌に変貌してしまいます。これは、初期議会において、日清戦争直前まで民党が軍備拡張予算に反対して民力休養を求めていたのに、開戦と同時に軍備拡張予算が通り、挙国一致の体制が作られていったことと軌を一にしています。歴史研究者は、自由民権運動が「民主化」という目標と同時に「国民国家づくり」という役割を担っていたことがナショナリズム高揚を容易にしましたと論じています。まさに「オッペケペー節」の歌詞は民権重視から国権重視へシフトし、民衆を戦争支持へ駆り立てる役割を果たすことになってしまったのです。

資料 1

オッペケペー節 (1890 ~ 93)

権利幸福きらいな人に自由湯をば飲みたい
 ㇿオッペケペッポーペッポッポー
 かたい上下(かみしも)かどとれて マンテルズボンに人力車 いきな束髪ボンネット 貴女に紳士の扮装(いでたち)で
 うわべの飾りはよけれども 政治の思想が欠乏だ 天地の真理がわからない 心に自由の種をまけ
 オッペケペ・オッペケペ・オッペケペッポーペッポッポー

オッペケペー節 (1894 ~)

今度この度噂の高い 支那と日本の戦ひは
 ㇿオッペケペ・オッペケペ・オッペケペッポン・ペッポンペー 思ひのほかの野蛮国 日本の義侠をあだになし 天津条約知らぬ顔 朝鮮独立妨ぐる 頑迷不霊の清国は 開明進歩の邪魔をする 東洋平和の敵国だ 清国立派に口あけて
 李鴻章だの賢いの ナリにも似あはぬ
 ホラ吹いて 成歓・牙山の戦ひに 一も二もなく敗軍し 恥をも知らぬ意気地無し
 それでも兵士と云はりようか 早く降参するがよい
 オッペケペー・オッペケペー・オッペケペッポン・ペッポンペー

資料 2

各国の普通選挙導入時期

第1次世界大戦 (1914 ~ 18)
 イギリス (1918)
 オランダ (1919)
 ドイツ (1919)
 アメリカ (1920)
 日本 (1925)

デモクラシー節 (1919年)

ㇿ血潮流して連隊旗とれたコリヤコリヤ
 おらに選挙権何故くれぬ
 ヨーイヨーイ デモクラシー

ㇿ軍艦たたいて進水させたコリヤコリヤ
 おらに選挙権何故くれぬ
 ヨーイヨーイ デモクラシー

国民の戦争協力と普通選挙運動 …「デモクラシー節」

大正時代を学ぶ際に欠かせない項目が、普通選挙運動です。もちろん、この運動のベースには、民本主義や天皇機関説があり、その後の労働運動など社会運動の高揚があります。ここで注目したいのは、総力戦体制づくりと普通選挙の関係です。授業では、まず「各国の普通選挙制導入時期」と「デモクラシー節」の歌詞をヒントに、なぜ世界の強国が国民に選挙権を与えるようになったのかを考えました(資料2)。

資料をみて、普通選挙が、世界的にみると、第一次世界大戦後に一斉に登場してきていることを確認します。では「なぜこの時期に登場したのかを考えてみよう」と切り出し、「それを考えるヒントとなる1919年当時日本で流行した『デモクラシー節』を紹介します」と述べて歌を歌います。「デモクラシー節」は演歌師・倉持愚禪が作詞し、普選運動の中でさかんに歌われたものです。歌の紹介が終わったら、生徒たちに「なぜ世界の強国が国民に選挙権を与えるようになったのか?」、その理由を考えてもらいます。ポイントは「第一

次世界大戦」です。教科書には第一次世界大戦が「国民の戦争協力を必要とする総力戦」だったと書かれています。やがて生徒たちの中から総力戦体制と普通選挙の関係に気づくものがでてきます。各国政府は、国民を戦争協力にかり出すため、協力の見返りとして普通選挙を認めていくのです。その視点で「デモクラシー節」をとらえると、「血潮流して:」「軍艦たたいて:」戦争に協力しているのに「選挙権何故くれぬ」と政府に要求したことが、逆手にとられ、「では選挙権をあげますので、戦争に協力して下さい」と切りかえされたという構図

になっていることがわかります。つまり、普通選挙制度は国民の戦争協力とリンクする形でスタートしたのです。日本では普通選挙法と治安維持法がセットで成立しているのではおさらです。戦争協力からはみ出すものは「非国民」として処罰される対象となるのです。

ラジオ放送と「満州行進曲」

普通選挙の実現によりデモクラシーを手にした国民ですが、1931年の満州事変を機に、積極的に戦争を支持していくこととなります。ここでは、歌を通じて、なぜそのようなことになってしまったのかを考えます。今では関東軍の自作自演による戦争であったことが明らかになっていますが、当時は満鉄の線路爆破は中国軍の仕業であるというフェイクニュースが流され、日本の権益を守るための戦争であると報道されていました。

当時の報道で重要な役割を果たしたのがラジオです。1925年から放送が開始されたラジオの契約数は、この事変をきっかけに100万を超えました。つづいて、そのラジオで流され流行した「満州行進曲」という歌を紹介します。歌詞の中には満州を「日本の〇〇〇」であると下りがあ

りますが、その部分に入る言葉を、生徒たちに考えてもらいます。答えは「生命線」です。軍部や政財界は、ラジオ放送などを通じて「満蒙は日本の生命線」として繰り返し、国民の戦争協力を訴えたのです。

戦争後、軍事産業を中心に景気は回復、満州への開拓奨励などもあり、国民の多くは戦争を支持することになっていきました。世論誘導について、ラジオなどのマスメディアの果たした役割、また歌の果たした役割は忘れてはなりません。

総力戦体制づくり

：「隣組」「埼玉縣民歌」

授業で大政翼賛会を扱う時に歌った歌が「隣組」と「埼玉縣民歌」(資料3)です。「隣組」の曲調は明るく軽快な曲ですが、「何軒あるうと一所帯」とか「心は一つ」という歌詞のあたりを強調して戦時体制下の生活を想像してもらいます。隣組は、首相を頂点とするピラミッド構造の末端で、近所の人同士が相互監視し、同調圧力を發揮して戦争への協力を進める組織であったことが浮かび上がってきます。

「埼玉縣民歌」は、1942年に大政翼賛会と埼玉県が、総力戦に県民の力を総結集する目的で、広く県民から歌詞を募集し

てつくられたものです。当時の『読売新聞』の記事(資料4)と歌詞の内容から読み取れることを生徒たちにあげてもらいます。いろいろできそうですが、なかでも抑えておきたいポイントは、第一に、歌詞の中に戦意高揚や天皇崇拜などが盛り込まれていることです。それはこの歌が大政翼賛会の埼玉県支部によってつくられていることによりります。

大政翼賛会は、総裁の首相のもとに、各県知事が支部長となり、県ごとに競い合いながら総力戦体制づくりを進めていました。歌詞の中に埼玉県に残る防人の故事を引用している部分がありますが、県民の天皇に対する忠誠心が古来からのものであること強調し、埼玉県民であることへの誇りを喚起して戦争協力を引き出そうとしているのです。第二はこの歌が公募形式で作られている点です。これは当時、軍歌をつくる際に多く用いられていた方法でした。ちなみに1944年に、内務省情報局が歌詞を公募した「必勝歌」の場合、一等入選の賞金は3000円(今の600万円に相当)でした。賞金目当ての部分があるにせよ、多くの国民が軍歌づくりにも動員され、結果的に戦意高揚の一翼を担うことになったのです。第三にこの歌が作られた

資料3

埼玉県民歌（1942年）

♪大君の勅（マケ）のまにまに 背（ソビラ）には箭をばたてじと 防人の勳（イサオ）はたかく 烈々の気魅（キハク）は今に 脈々と流るる所 尽忠の血潮湧きたつ

大意：天皇の命をうけ、敵に背を向けず戦った防人たちの武勳と気迫は、今も脈々とここに流れている。国に尽くす忠義の血潮が湧いてきた。

資料4

読売新聞（1942年10月24日）

リード部分

翼賛会（大政翼賛会）県支部募集の「埼玉県民歌」は応募六百一点につき、A事務局長、文報（日本文学報国会）理事・B氏ほか各審査委員が慎重審議の結果、二十三日左の通り入選者が決定した。作曲を東京音楽文化協会に委嘱、十一月中旬に発表会を開催するがこれを印刷して県下に配布、常会等に唱和して闘う県民の士気をたかめることとなった。

時期の問題です。すでにアジア太平洋戦争がはじまって10カ月が過ぎ、物資の不足から国民の日常生活は苦しさを増していました。ましてやミッドウエーでの敗戦後、日本は劣勢になっていたので、士気の向上や厭戦気分を払拭は大政翼賛会にとって重要課題だったでしょう。第四に、この歌がどのような場で歌われたのかという点です。新聞記事によれば「常会等に唱和して士気をたかめる」とされています。「常会」とは大政翼賛会の末端組織である隣組の定例会議のことです。近隣の家庭同士が歌を

通じて団結し、戦争協力の落伍者を出さないよう相互に監視しあうような構造になっていたのです。

やまひら

ある生徒は近代史における歌の役割について以下のように述べています。

「僕は歌の力を使った支配はとても強い影響力があったと思います。：戦争協力を駆り立てる歌が推奨され、気づけば洗脳的支配が完成されてしまったのだと思います。僕はどうして戦争にたくさんの人が加わったのか疑問でした。それを高校で知ることができました。人の同調的圧力、音楽やスローガンをを用いた統制、天皇の神格化。こ

ういった時代背景によって戦争意識が高まったのだろう：」

近年の歴史研究によって明らかにされてきた「総力戦体制論」（成田龍一『近代日本史と歴史学』中公新書）では、1920年代の大衆化した生活・文化の中から、1930年代のファシズムが自生的に登場してきたという点に注目しています。つまり、デモクラシーが敗れてファシズムへ移行してしまったという側面よりも、デモクラシーゆえにファシズムを支持してしまった側面を重視しているのです。この日本の総力戦体制づくりと並行してドイツでは、民主主義的手続きをへてヒトラーが独裁体制を築きました。ヒトラー率いるナチスは1932年の普通選挙によって国会で第一党なり、合法的に政権を獲得した後に憲法の緊急事態条項を利用して強大な権限を手に入れ、ナチス以外の政党を認めないファシズム体制を構築していったのです。

さて振り返って現代の日本社会は大丈夫でしょうか。民主化されているから戦争が遠くにあるというのは幻想でしかありません。国民がいつどのような状態で戦争に駆り立てられたのか、私たちが常に学びつづけることが求められています。